

## 社会科・地理歴史科教育法の内容と受講者の意識

# A study of the course content of Teaching Methods in Social studies and Geography-History and the students' awareness

稲田 克二

Katuji INADA

### (要旨)

筆者は神戸学院大学において、2012年から社会科・地理歴史科教育法を担当している。そこで実施した各年度4単位30回分の授業内容を示すとともに、受講生の意識を調査・分析した。

この授業では4単位30回の授業のうち、1/4を中学校社会科学習指導要領、高等学校地理歴史科学習指導要領の読解と解説、並びに各教科・科目の学習指導案の作成指導にあて、受講生が社会科・地理歴史科教師としての知識・技能を習得できるように指導している。また残りの3/4は、学生に自ら作成した学習指導案に基づいて模擬授業を行わせ、社会科・地理歴史科教師として実務が遂行できるように指導している。またこの模擬授業については、当該学生以外の学生は「生徒」としてその模擬授業を受講するとともに、模擬授業の評価もさせている。

最終回に1年間の授業に関してアンケートをとっており、それを通してこの授業に対する学生の意識を調査し、分析した。

### (Summary)

The author has been in charge of the class of Teaching Methods of Social Studies and Geography-History at Kobe Gakuin University since 2012. He surveyed the 30 lessons of this class, investigated and analyzed what the students were able to take from this class.

One quarter of the 30 lessons are allotted to the study of school curriculum guidelines of junior high school as well as the guidance of learning how to make the teaching procedures of each subject, so that the students can acquire the knowledge and the skills of teaching as a teacher of social studies or geography-history. The remaining three-fourths of this class are allotted to mock lessons based on the teaching procedure of their own making. The students learn how to create practical class through these mock lessons. The students attend the mock lessons with their comments and evaluation about the simulated class in the role of a student. At the end of this class of the academic year, the students answer the questionnaires about this class. The study explored the result of the questionnaires and analyzed how they have changed their attitude towards being a teacher and what they were able to take this class.

キーワード：考える社会科、指導案作成、模擬授業、模擬授業の評価

Key Words : thinking social studies, teaching procedure, mock lesson,  
evaluation of mock lesson

## はじめに

社会科・地理歴史科教育法に関する実践報告は多数なされている。たとえばシラバスに関するものでは、木下<sup>1)</sup> 渡辺<sup>2)</sup> が、教職科目として履修している学生の意識に関するものでは藤波<sup>3)</sup> 岩野<sup>4)</sup> 戸田<sup>5)</sup> が、学習指導案作りに関するものでは中村<sup>6)</sup> が、授業の展開方法に関するものでは山岡<sup>7)</sup> 小栗<sup>8)</sup> 等、種々の分野から多くの研究がなされており、各々示唆に富んだ報告となっている。しかし、通期30回の授業に関して、その内容と、学生の活動や意識に関して記述されたものは多くない。

そこで、筆者は神戸学院大学で担当している社会科・地理歴史科教育法について、通期30回の授業内容を示すとともに、この授業の受講生の状況や意見・感想を報告し、今後の授業改善に向けた課題を検討することとした。

### 1. 社会科・地理歴史科教育法の開設状況

筆者は2012年から神戸学院大学で社会科・地理歴史科教育法を通年4単位で担当してきた。この授業では、法学部、経済学部、人文学部、経営学部にも所属する、社会科・地理歴史科の教員免許取得希望者が受講する形となっており、受講者数は毎年約60人程度で、2014年度の場合、学部別では法学部が18人、経済学部が15人、人文学部が26人、経営学部が4名で2年生が中心となっている。なお2015年度からは、学部の移転により、有瀬キャンパスで経済学部と人文学部の学生だけを担当することとなり、受講者数も経済学部11名、人文学部18名と昨年度に比べ半減した。このため過去3年間の授業内容と、2015年度の授業内容にはいくつかの相違点が出てきたため、今回は2012年度～2014年度の3年間で行った授業の報告を行い、2015年度の報告は別の機会に行う予定である。

### 2. 社会科・地理歴史科教育法受講者の状況

2012年～2014年の3年間に受講した学生の社会科・地理歴史科教員への意識等については、毎年第1回目の授業でアンケート調査を行っている。それによると、この授業を選択し、「社会科・地理歴史科教員を目指す理由は何か」という問いに対して、約50%の学生が、「小学校～高等学校での社会科の先生がよかったから、魅力的な授業をしていたから、授業が楽しかったから」と答えており、小学校～高等学校で良い社会科・地理歴史科教員にめぐり合い、感銘を受けて自分の将来の職業にしたいと考える学生が約半分いるのである。このことは、本学の学生が兵庫県はもとより、西日本各地から入学していることから考えると、わが国の多くの学校では、優れた教育実践を行っている社会科・地理歴史科教員が多数存在していることを示していると考えられる。そして、このことはわが国の小学校～高等学校での社会科・地理歴史科教育が、この教科・科目科が好きな児童生徒にとって学校卒業後、同教科・科目の教師になりたいという人生選択に大きな影響を与えていることも示している。このような良好な意識を持って社会科・地理歴史科教員を目指す学生を指導することに関して、大きな喜びと同時に責任を感じる次第である。

続いてに約30%が歴史・地理が好きである・興味がある・得意であると答え、「好きこそもの上手なれ」で子どもの頃から社会科が好きだから、社会科の先生になりたいと考え

ている学生が1/3程度いる。

その他所属学部で取得できる教員免許が社会科・地理歴史科であるという消極的理由や、運動部の部活動の指導者になりたいので、教科を問わず教員免許取得を目指す学生も数人いる。

次に、卒業後の就職希望先について調査したところ、この科目の受講者の多くは2年生であるため、未確定な部分が多々あるとは考えられるが、社会科・地理歴史科教員を第1志望に上げている学生の比率は約40%であり、残り約60%の学生は教員への就職を第1志望とはしていない。第1志望で教員を目指さない学生の就職希望先としては、公務員（地方公務員・警官）が約40%を示し、他の金融・鉄道・放送・IT関係などを大きく引き離し、特段の多さとなっており、いずれにしても教員・公務員への就職希望者が全体の約60%以上を占めている。これはこの科目を選択している学生の約69%が法学部と人文学部であることから考えれば、当然の結果であるとも考えられる。

### 3. 社会科・地理歴史科教育法の授業の目的・到達目標・授業計画・内容

ここでは、シラバスに示したこの授業の目的、到達目標、授業計画とその指導内容を示す。

#### ○授業の目的

中学校社会科・高等学校地理歴史科の教員になるにあたって、その心構えを醸成し、指導内容を把握し、指導力を確立させる。『学習指導要領』を読解し、何をどのように教えるかを総合的に理解し、実践できる社会科・地理歴史科教師を育成する。特に暗記科目から脱却し、論理性・法則性や因果関係等を追及する「考える社会科」を目指した学習指導案の作成や、模擬授業演習などを通して、社会科・地理歴史科教師としての実践的能力の育成を目指すことを目標とする。

1. 社会科・地理歴史科の各科目の授業の目標を立て、内容を把握できる。
2. 社会科・地理歴史科の各科目の指導計画を立てることができる。
3. 社会科・地理歴史科の各科目の学習指導案を作成できる。
4. 社会科・地理歴史科の各科目の模擬授業ができる。
5. 副教材や教具を適切に使用できる。
6. 教材研究・授業のシュミレーションの重要性を理解する。
7. 他者の模擬授業や研究発表を見て、自らの視野を広め、教育技術を向上させる。
8. 社会科・地理歴史科の学習の楽しさを指導できる。
9. 研究と修養の重要性を理解する。

#### ○到達目標

1. 中学校社会科・高等学校地理歴史科教員になるための、学習指導方法が理解できる。
2. 『学習指導要領』が理解できる。
3. 学習指導案を作成できる。
4. 模擬授業を行うことができる。
5. 他者の授業を評価できる

6. 「考える社会科」を实践できる。

○授業計画・内容

- 第1回 オリエンテーション 中学校社会科・高等学校地理歴史科を指導するにあたって
- ・社会科・地理歴史科教員としての意識・意欲を醸成し、職務の内容などを理解する。
  - また学校の教育活動の基準である『学習指導要領』を理解する。
- 第2回 中学校社会科地理的分野、歴史的分野、公民的分野の目標と内容（1）
- ・『中学校学習指導要領』に示された、社会科地理的分野、歴史的分野、公民的分野の目標を読解し、理解する。
- 第3回 中学校社会科地理的分野、歴史的分野、公民的分野の目標と内容（2）
- ・『中学校学習指導要領』に示された、社会科地理的分野、歴史的分野、公民的分野の内容を読解し、理解する。
- 第4回 中学校社会科地理的分野の学習指導案作成
- ・『中学校学習指導要領』の趣旨に基づいて、社会科地理的分野の学習指導案を作成する。
- 第5回 中学校社会科歴史的分野、公民的分野の学習指導案作成
- ・『中学校学習指導要領』の趣旨に基づいて、社会科歴史的分野・公民的分野の学習指導案を作成する。
- 第6回 高等学校世界史、日本史の性格と目標
- ・『高等学校学習指導要領』に示された、世界史、日本史の内容を読解し、理解する。
- 第7回 高等学校地理の性格と目標
- ・『高等学校学習指導要領』に示された、地理の内容を読解し、理解する。
- 第8回 高等学校世界史、日本史の学習指導案作成
- ・『高等学校学習指導要領』の趣旨に基づいて、世界史、日本史の学習指導案を作成する。
- 第9回 高等学校地理の学習指導案作成
- ・『高等学校学習指導要領』の趣旨に基づいて、地理の学習指導案を作成する。
- 第10回～第14回 模擬授業演習
- ・受講者が作成した学習指導案に基づき模擬授業を行い、他の受講者は「生徒」として参加し、その結果について合評する。
- 第15回 前期のまとめ
- ・前期に行った学習内容をまとめる。模擬授業の内容などについて討議する。
- 第16回～第29回 模擬授業演習
- ・受講者が作成した学習指導案に基づき模擬授業を行い、他の受講者は「生徒」として参加し、その結果について合評する。
- 第30回 後期のまとめ、1年間のまとめ
- ・後期に行った学習内容をまとめる。1年間の授業を通して、社会科・地理歴史科教師になるための決意を固める。
- 以上が2014年度の1年間の授業の計画・内容である。ただし受講者全員に必ず1回の模



擬授業をさせることを第一義としていたため、予定では第10回から模擬授業を開始する予定であったが、受講者数を勘案して、学習指導要領の読解・理解の回数を整理し、模擬授業の回数を増やした。

この授業で特に重点を置いたことは、1. 『学習指導要領』を理解できること。2. 学習指導案を適切に作成できること。3. 模擬授業を通じて、学習指導ができること。4. 他者が行った模擬授業を適切に評価できること。5. 社会科・地理歴史科を暗記科目としてではなく、社会科学として「考える社会科・地理歴史科」として認識できることの5点であった。

1. 『学習指導要領』を理解できることについては、まず憲法・教育基本法・学校教育法・学校教育法施行規則の一連の教育に関する法体系の概略を示し、『学習指導要領』の趣旨の説明を行い、特にわが国の小学校～高等学校で指導されている教科・科目は、すべて『学習指導要領』に規定されていることを理解させる。その後、『学習指導要領』の読解・理解にすすんだ。

2. 学習指導案を適切に作成できることについては、学習指導案の構成を説明し、基本的な作成方法を理解させる。それに基づいて受講者全員にまず1回学習指導案を作成させ、提出させた学習指導案を1人ごとに添削指導して返却し、次に1回目とは異なる別の分野で学習指導案を作成させ、それを添削指導をした。また夏期休業中の課題として、さらにもう1回学習指導案を作成して提出させ、合計3回学習指導案を作成させた。

この指導については、学習指導案の雛形<sup>9)</sup>をもとに作成方法を説明し、各学生に学習指導案を作成させ、不十分なところを添削指導する方法であったため、一度学習指導案の作成方法を習得すれば、科目や分野が変わっても円滑に作成できるようになる学生がほとんどであった。

3. 模擬授業を通じて、学習指導ができることに関しては、本授業の最も重要かつ、重点を置いて指導を行った活動である。事前に授業についての言葉遣い、声の大きさ、板書の構成、板書の文字、発問の方法、顔の表情などの授業を行う上での「作法」や留意点、教材研究の重要性などを細かく説明しておき、各自が作成した学習指導案に基づいて模擬授業をさせた。

模擬授業の実施に関しては、受講者数が多いため1回の授業時間で3人、1人20分程度で模擬授業を行い、各人の模擬授業終了後受講者で5分程度合評をさせた。多くの学生は大変緊張して授業を行ったが、事前の練習成果を十分に発揮できなかった者や、逆に事前準備に十分な時間をかけ、堂々と授業ができた者など様々であるが、学生にとっては最も貴重な体験となっている。この体験についての感想は次章でまとめた。また他の学生は「生徒」になり、その模擬授業に参加するとともに、次に示した評価表を書かせる活動も同時に行った。

4. 他者が行った模擬授業を適切に評価できることについては、受講者が順番に行う模擬授業を、「生徒」の視点と「教師」の視点の両方から、別紙に示した評価表で評価をさせた。この評価表は、授業の目標、授業理解への工夫、学習への意欲づけ、生徒の状況、授業環境の整備、総合評価の6点をA～Cの3段階で評価し、さらに良かった点、改善すれ



善すればよくなる点の記述については、客観的かつ辛辣に記述されており、模擬授業実施者にとっては、うれしいこともあるが、反省点を見つげられるため特に好評であった。

5. 社会科・地理歴史科を暗記科目としてではなく、社会科学として「考える社会科・地理歴史科」として認識することについては、筆者が特に1年間を通じて強く指導し続けた項目である。多くの学生は「社会科・地理歴史科は暗記科目」であり、ただ丸暗記し暗記量の多寡で優劣が評価されると思って最初の授業に臨んでいる。また「入試に出るから」、「試験に出すからこの項目を暗記せよ」とも指導されてきており、社会科・地理歴史科が「暗記科目」である、と深く認識している。そのため、これこそが「社会科嫌い」生む最大の原因であることを強く指摘した。

そこで筆者はこの「社会科・地理歴史科は暗記科目である」という間違った認識を払拭し、「考える社会科」の視点を持たせるために、地理であれ、歴史であれ、その事象について、「なぜなんだろう」「こうではないか」という考え方に立ち、因果関係や法則性・論理性を考えることこそ社会科・地理歴史科の最も重要かつ根本的な学習の基本であることを、執拗に指導した。

その結果、模擬授業でも初期の段階では年号や地名を問う発問をする学生が多かったが、後期になると「なぜ」「どうして」という発問を工夫するようになってきた。この「考える社会科・地理歴史科」の視点に立つことが、社会科・地理歴史科の本旨であり、この教育を推進することにより、社会科嫌いの生徒を減らし、「社会科・地理歴史科＝暗記科目」の誤った認識を払拭できることを、学生も徐々に理解できてくるようになっている。

#### 4. 授業終了後の学生の感想

1年間の授業の最終回に次の質問をしている。1. この授業を受けて、あなたはどんな力や技術を身につけることができましたか。2. あなたが身につけたかった力や技術で、この授業では得られなかったものにはどんなものがありましたか。3. 1年間社会科・地理歴史科教育法を受講して、あなたの「社会科教師になりたい」という意識や意欲に変化がありましたか。などである<sup>10)</sup>。ここでは最新の資料という観点から長大になるが、2014年に実施したアンケートを原文のまま示した。

##### 1. この授業を受けて、あなたはどんな力や技術を身につけることができましたか？

「前に出て人前で話し教える力」・「どのようにしたら考える社会科の授業になるかということ」・「声の大きさ」・「板書の字の大きさと濃さ」・「まず「人前に出る」ということ」・「観察力により視野がひろがった」・「どんな授業が生徒にとって退屈な授業なのか、どんな授業が生徒にとって楽しく学べる授業なのかということ」・「良い点をたくさん」・「教師体験をすることによって、生徒の発言に対する反応のしかた」・「他の人の授業を見ることによって、人の良いところや悪いところを見抜く力」・「人の良いところを見る力」・「指導案をつくる力」・「人前で話す力」・「授業の構成を考える力」・「ノート、板書の構成を考える力」・「他人の技術を盗む力」・「洞察力」・「人前で話す時のふるまい」・「手持ちのプリントだけを見るのではなく、しっかりと生徒の方に目を向けること」・「メリハリ」・「授業をしていく

上で大事なこと、してはいけないことを考え、実践する力、それを見極める力」・「自分が知っていることを知らない人に教え、理解させること」・「他の人がする模擬授業を見たりして、どんなところが良かったか、悪かったかなど、授業を見る力がついた。これによりまとめる力もついた」・「他の人の授業の進め方などを盗む力」・「自分の力だけで一つの事をやり遂げる力」・「準備をそつなくする力」・「生徒である目線と教師からの目線を学んだ」・「他の模擬授業の良いところ、改善するところの見極め」・「生徒に対してどのように向き合えばよいか」・「知識や経験が現場でいかに重要かを知れた」・「声の大きさや色づかいなどの工夫の仕方もわかった」・「授業を準備していく上での計画を立てる技術」・「自分の授業をどうやって行っていくかということをしっかり考え、人の良いところを盗んでいく力」・「初歩的なスキルから発展的なものまで全て見ることができ、その失敗や成功を見ることができた」・「教師とは生徒を導くという立場にあり、もちろんその真価は生徒に対する教育への思いやりがその一端をしめる。この授業ではどのような授業が分かりやすい授業になるかがわかった」・「実際に授業を作っていく力、内容をまとめる力」・「特に授業をする際の表情、言葉づかいが勉強になった」・「自分で授業(プレゼン)する前の準備する力」・「どうやって人に理解してもらうか伝える力」・「人の授業を見て、自分の授業に取り入れていく力」・「仲間の良いところを見つけることができる分析力」・「教材研究の大切さや授業を行うための知識や技術」・「何も知らないということを前提とした人に対する教科の教え方」・「学習指導案に関して様々な形式について触れることができ、それを踏まえて自己流のものがつくれたこと」・「友達の模擬授業を見て、どんな所が良くて、どんな所が足りていないかを見る目を養い、力がついた」・「実際に授業をやってみて、人前に立って、みんなが自分を見ている状況に少し慣れたような気がしたし、もちろん授業スキルも向上した」・「その時の授業だけでなく、復習しやすいようにはどういう板書をしたらいいかを考えるようになった」・「どういう言葉で語りかけたらいいかがわかった」・「とにかくその分野に熱いきもちでやるのが大切だと思うようになった」・「実際に授業を行うことで、頭では理解できていても実行できないことがよくわかった」・「教授法については、国語科教育法などの他の授業でも様々に学んだが、初めて授業を行う生徒ならではの工夫が見られて新鮮であった。こんな方法もあるのかを知れたことが一番の収穫であった」・「他の人の授業を聴いて良い部分を見つけることができた」・「どうすれば理解が深まるのか、どのように生徒に対して授業を展開していくかといったことが、身をもって感じることもできた」・「自分が授業し、また他者の授業を聴き、授業を深めることができた」・「指導案の作成の仕方・授業を行うために必要な技術」・「人前で話す力やコミュニケーション能力」・「相手を思う力などを深く考えるようになった」・「本物の先生による授業のコツや小ネタ・相手に考えさせる力」・「人前に出て授業をするということがどんなことかを実際にやって体感できた」・「授業を行う時の声の大きさ、字の大きさ、話をするスピード、授業展開の構成などを理解できた」・「事前の準備や十分な練習の重要性」・「話しながら考える力、何かをしながら考えたり、周囲の状況を把握する力」・「他人の授業からやってはいけない点や、良い点を見ることができたこと」・「みんなの前で授業をする度胸」・「授業をする上で最低限気を付けなければならないこと」・「生徒に考えさせる質問を心がけること」・「授業を通



して生徒に何を身につけさせたいかを考えることができるようになったし、模擬授業を通して、実際どういった感じで授業をしたら良いかなど、授業とはこういう感じなのか、ということをつかむことができた」・「やっぱり模擬授業が一番大きかって、これまで人の前で授業をしたことがなかったし、バカだったので教えてもらってきただけだったので、いざ自分が教えるってなって、教えるからには自分がわかっていないとだめだし、知っておかないとだめだし、知ってわかってでも実際教えるのはむずかしいし、でもだからどうしたら伝わるか、前に立つことの責任感を知れて、それをできるための方法を少しは得られたんじゃないかと思う」

これらについてまとめると、

- ・板書の構成や文字の大きさ、話し方、声の大きさ、表情などの基礎的・技術的なことが体得できた。
  - ・学習指導案の書き方や、1時間の授業の構成方法が理解できた。
  - ・教材研究の重要性が理解できた。
  - ・人の授業を見ることで、自分の良いところや不十分な部分が理解できた。
  - ・クラスの仲間が真剣に挑戦している姿を見て、自分自身の意欲が向上した。
- など、非常に謙虚にかつ前向きに捉えている学生が大半であり、社会科・地理歴史科教育法の授業の目的は不十分ながらもある程度達成できたのではないかと考えている。

## 2. あなたが身につけたかった力や技術で、この授業では得られなかったものには、どんなものがありましたか？

「板書の字の綺麗さ」・「どのようにしたら、生徒に授業を聞いてもらえるかということ。たとえば、寝ている生徒はどのようにしたら、授業を聞いてもらえるか」・「模擬授業を行う機会が少なく、1度目に行った授業の反省点を生かした2度目の授業を行うことができなかったこと」・「先生の現場での経験の話をもっと聴きたかったこと」・「はやく書く力」・「教師としての授業体験があまりできなかった」・「板書力、授業を経営する力、指導力」・「板書の字を丁寧に書いて見やすいレイアウトにする力」・「元気に明るく授業をする力」・「全体を見なければいけないと感じた」・「無言の時間を減らす」・「黒板を使っての作業（板書の筆圧やスピード）」・「模擬授業をしても、自分の中にまだまだ自信が得られなかったので、そこを深めていきたい」・「人前に出て授業をしましたが、やはりうまくいかず一度だけでは技術はつかないですが、授業をする力というのが、まだ身につけていないと思います」・「授業の中でハプニングが起こった時にすばやく対応できるような応用力」・「メンタルの強さ（1回目で100%の力を出せなかったこと）」・「得るものしかありませんでした」・「板書の仕方や説明の仕方」・「もっと表情を豊かにしたり、声に抑揚をつけたかった。また時間配分ももっとしっかりしたかった」・「前回の復習からの発問ができなかった」・「実際の生徒への授業でないので、アクシデントのフォローがわからなかった」・「もう少し実際の教育現場の話が聞けたら参考になったと思う」・「副教材の活かし方」・「おおむね得ることができた」・「時間をもう少し長く模擬授業をしてみたかった」・「字を丁寧に書くこと」・「特に思いつかない」・「コミュニケーション能力」・「授業を行う上で、生徒を引き付け

ることができる能力」・「うまい導入を行うにあつたての技術」・「もっと話す力やたくみな言葉づかいなど経験的なもの」・「実践的な授業を行ううえでのコツ」・「大学生なので発問してもだいたい求めているような答えが出てしまうので、中学生相手に実際授業をすると、戸惑いそうである」・「特に板書の一点、自主練習するしかないのでしょうか」・「授業をする上で最低限度気をつけなければならないことが知識としてはわかったつもりであったが、いざ授業をすると声が小さかったり、板書がゆがんでいたりとできていない点が多かった。知識だけでなく、いろんな場での経験により慣れていかないと身につかない、得られないと考えられる」・「仲間意識や思いやり。やっぱり1年通しての授業だったので、顔見知りになってくのに、模擬授業の感想や見る態度がひどすぎたり、冷たい人がいて、もっと一緒に頑張っているメンバーの良いところを見つけあえるクラス的な授業であっても良かったんじゃないかと思った」

以上をまとめると、模擬授業経験は1人1回で、時間も20分しか与えられなかったため、思うように目標が達成できなかつたと示す学生が多い。この指摘は非常に重要で、社会科・地理歴史科教育法という科目はアカデミックな研究ではなく、教育技術を習得するための技術教育であり、繰り返し実習をすることにより教育法を体得するものであるので、できれば少人数で丁寧な指導ができるよう、1講座あたりの受講者数に関して検討すべきことがあると考える。

### 3. 1年間「社会科・地歴科教育法」を受講して、あなたの「社会科教師になりたい」という意識や意欲に変化がありましたか？

「模擬授業をおこなったことで、教師になるという実感を得た」・「変わらず社会科教師になりたいと思い、同時に社会科について様々なことを学んでいきたいと思った」・「本当に社会科教師になりたいという気持ちが増した」・「社会科教師を目指す気持ちは強まった。他人の授業を受けて自分だったら違った方法でわかりやすく説明するのに、と思うことが多々あり、授業をしたいという気持ちが強くなった」・「改善すべき点などが見つかって、もっとうまく上手になりたいと思った。結果高まった」・「とても高まった」・「授業をする楽しさや難しさを感じるとともに、さらに技術の向上を目指し、社会科教師になりたいという意欲が湧いてきました」・「模擬授業をしたことで、授業をする楽しさが味わえた。いままでよりもっと先生になりたいと思った」・「より日本史の事が好きになったので、教師になろうという意識は強くなった」・「ただ漠然としていた目標が明確になってきた。また不安や揺らぎもでてきた」・「みんなの授業を見る限りでは、そこまでも考えなかったが、いざ自分も授業をしてみると、教師は大変なんだなと実感した。これからもっと鍛えていきたいと思えた」・「みんなの授業をみて、自分にあてはめて、自分を直す機会にもなったのでし、次にこんな授業をしたいというイメージも湧いてきた」・「前よりもより教師になろうと思った。他の人の模擬授業から、負けてられないと思った」・「さらに高まった。社会科教師になるために、さらに努力しようと思っている」・「自分の実力の不足さを実感して、もっとがんばろうと思った」・「意欲は増してきている。実際に授業するのは楽しかった。計画から実際にするまでの流れをしっかりとできるよう、これから勉強していきたい」・

「他の人のいい授業を見て、もっと勉強しないといけないと思った」・「より意欲が高まり、教え方を考えようと思った」・「実際の授業を通じて、授業をすることというイメージができたし、意識や意欲も上がった」・「色々な人がいる中で、自分をもっと本気になって勉強すべきであると思った」・「相変わらず高いです」・「意識の高い周りの生徒と過ごして、より明確に先生になりたいという意識が高まった」・「約1年前よりも圧倒的に教員になりたいという気持ちが強くなった」・「1年前よりもはるかになろうとする意思が強くなった」・「すごく高くなった」・「国語も取っているが、実際に授業をするにあたっての準備がとにかく大変な印象を感じた。研究すればするほど面白くなって詳しく話せる反面、精選が難しく教える範囲が半端になってしまう。今まで何となく先生だった部分が、先生とはどんなものか等多少つかめたと思う。意欲が高まった」・「社会科教師になろうとする意識や意欲はすごく上がった。実際に授業を行うことによって、もっと工夫してうまい授業をしたいと思うようになった」・「他の友達や仲間が多くて、理解してくれる人が多いので、意識が高まった」・「社会という言葉を意識するようになったし、向上心も皆に芽生えたと思う」・「模擬授業を通して、社会科の教師はどういった準備をして授業を行うか少しわかったので、より現実的に考えられるようになった」・「最初とあまり変わらない。ただまだまだ勉強不足だと感じた」・「授業をしてみて改めて教師という職業の大変さを身をもって痛感させられた。しかし意識や意欲は前と変わらず、いや前よりも強く出てきて、ある意味とても自分のためになる経験をさせてもらい、現実を知り、それに負けずいろんな経験を積み、社会科教師になりたいと、この講義を通して思えるようになれた」・「模擬授業の感想がさまざま、良く評価している人もいてくれれば、悪い評価をしてくれる人もいて、どうしたらいいのだとすごく悩んでやめようかと思ったことありましたが、でも全てが評価であっての今で、悔しい気持ちは改善して、嬉しい気持ちはもっとのばして増やして、良い先生になりたいって、今はすごく思っている」

・「この授業を通して、教師になる意識は低下し、教師にはなりにくいと感じた」・「難しい」・「人に教えるという点ではやりたい意識は上がったが、今は同じ年くらいの人で理解している人がいるが、子ども相手に同じようにできるのかという疑問が出た」・「ただ漠然としていた教師以外の目標が明確になってきた。また不安や揺らぎもでてきた」・「進路変更しようと考えている」・「何とも言えない」

この質問に対しては、最後に示した6人を除いて、それ以外の学生全員が社会科・地理歴史科の教師になりたいという意識・意欲が向上したと書いている。その記述も大変素直に書かれており、本学学生の最も良い点が示されていると考えられる。この結果から、授業の目的もおおむね達成できたと考えられる。

## 5. まとめと今後の課題

①2012年～2014年に行った社会科・地理歴史科教育法の授業の内容と、2014年に受講した学生の意見をまとめた。授業内容に関しては、社会科・地理歴史科教育の趣旨、『学習指導要領』の理解や解釈などのアカデミックな内容よりも、学習指導案の作成と模擬授業の

演習という実務的な技術教育に重点を置いて実施した。特に模擬授業に関しては全体の4/5の時間数を使い、受講者全員が必ず行うこととした。その際、他の学生が行う模擬授業に対して評価表を作成することを義務付け、それにより社会科・地理歴史科の授業を行うときに必要な知識・技術なども併せて習得できるようにした。

ただし、受講者数が多いため、模擬授業は1人1回、時間も20分程度しかできなかったため、目標の達成には不十分な面も多々あった。この点に関して特に受講者の不満が多く、模擬授業の実施回数を1人2回以上、または実際の授業時間に近い45分程度やりたいという希望がたくさんあった。また使用教室が大教室であるため、中学校・高等学校で実際の授業が行われているような40人程度の小教室での実習を希望する意見も多かった。

②受講者の意識としては、この授業を選択し、「社会科・地理歴史科教師を目指す理由は何か」という問いに対して、約50%の学生が、「小学校～高等学校での社会科の先生がよかったから、魅力的な授業をしていたから、授業が楽しかったから」と答えており、学校教育での教師の役割の大きさを示している。

また卒業後の就職希望先については、受講生の大半が2年生であるため、職業に関する明確な意識や意欲、希望はまだ形成されておらず、社会科・地歴科教員を第1志望に上げている学生の比率は約40%とあまり高くはない。しかし、小学校～高等学校時代から持ち続けてきた、社会科・地理歴史科の教師になりたいという漠然とした希望をかなえるため、教員免許の取得を目指す学生が多いとも考えられる。

③1年間この授業を受講したことについての感想としては、

- ・板書の構成や文字の大きさ、話し方、声の大きさ、表情などの基礎的・技術的なことが体得できた。
- ・学習指導案の書き方や、1時間の授業の構成方法が理解できた。
- ・教材研究の重要性が理解できた。
- ・人の授業を見ることで、自分の良いところや不十分な部分が理解できた。
- ・クラスの仲間が真剣に挑戦している姿を見て、自分自身の意欲が向上した。

など、多くの学生が、社会科・地理歴史科の授業に関する技術や手法が習得できたと思っている。

また模擬授業を行ったことにより、自らの意識や意欲が高揚し、あらためて教職を目指す学生も出てきている。その結果、この授業を受講し、教員になろうとする意識や意欲に関しては、数人の例外を除いては、多くの学生が向上したと示している。

このような状況に対応するため、今後教員採用試験の受験を希望する学生への手厚い指導や体制の整備が重要になってくると考えられる。

④現在、各学校ではICT化が進んで、コンピューターをはじめ最新の教育機器を使用した教育実践が行われており、また2022年度から実施される学習指導要領でもICTの活用がうたわれており、これに対応できる学習指導法についても今後言及する必要があると考える。

⑤2015年度には学部の移転があり、有瀬キャンパスでのこの科目の受講者は半減したため、上述した改善すべき点の多くは解消され、学習指導案の丁寧な個人指導と前期・後期



に各1回、計1人2回の模擬授業をすることができるようになっている。

このように、教育条件・環境が改善されたことを生かし、さらにこの社会科・地理歴史科教育法の授業を進化させなければならないと考えている。

#### 注

- 1) 木下百合子 (2012) : 社会科教育法における模擬授業 教科教育学論集 9-12 pp9-12
- 2) 渡辺竜也他 (2010) : わが国の初等・中等社会科教員養成の実態に関する基礎的研究 (Ⅱ) —「社会科教育法」シラバス分析及びアンケート調査を通じた仮説の検証— 東京学芸大学紀要 人文社会科学系 Ⅱ 61 : 1-35 pp1-35
- 3) 藤波潔 (2006) : 沖縄国際大学教職課程における中学校社会科教育法 —実践と考察— 沖縄国際大学総合学術研究紀要 10(1) pp65-86
- 4) 岩野清美 (2014) : 教職科目において学生の居場所感が高まる要因に関する探索的研究 —2013年度「社会・地理歴史科教育法」を事例として— 和歌山大学教育学部教育実践総合センター紀要 24 pp131-139
- 5) 戸田靖久 (2015) : アンケート調査から見た社会系教職科目受講生の意識と社会科教育法の課題 大阪産業大学論集 人文・社会学編 23 pp173-192
- 6) 中村清一 (2011) : 社会科教育法を学ぶ学生の社会科学習指導案に関する考察 研究紀要 (11) pp57-70
- 7) 山岡昭吉 (2008) : 社会科教育法における地理教育 千葉経済論叢 38 pp49-69
- 8) 小栗正彦 (2005) : 「社会科教育法」における授業の基本について (その1) 学び舎 (1) pp27-34
- 9) 学習指導案の雛型には、形式が種々有るが、ここでは大阪府教育センターで使用されているものを使った。
- 10) このアンケートについては、無記名で書かせたので、学生の本音が書かれていると推察される。